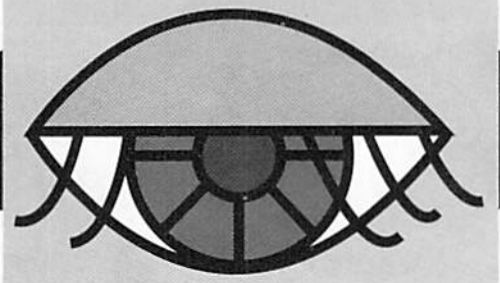


FAME Report

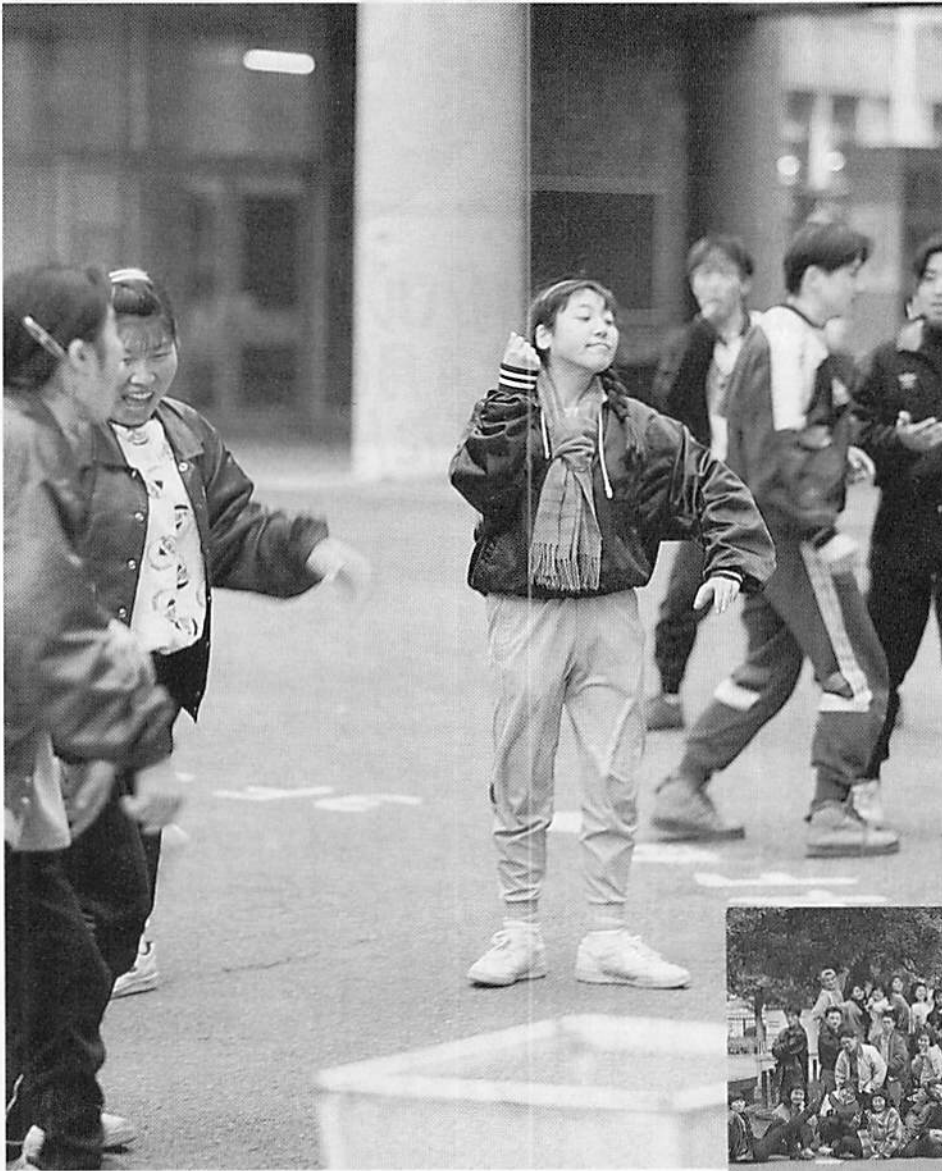


京都ノゾキ見トピックス

今年もKTLがいよいよ始動。 歌って踊る『赤毛のアン』を観に行こう。

ミュージカルを英語で演る。
これって、もしかしたら凄いいコトなのだ。

演出は京都産業大学の原田くん。チケットは京都外大購買部、京女丸善、同志社P.G.、同女書部、ほんやら洞などで扱い中。
(前売り800円当日1000円、立命館生協)



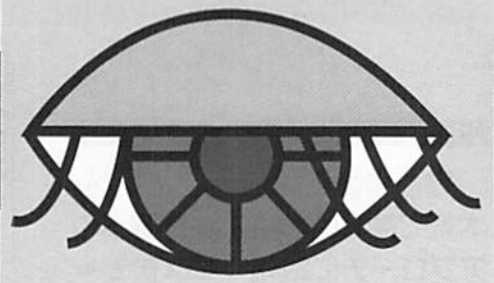
フォト/大田メグミ
ライター/大音美弥子

2月末に行われたオーディションでも英語力・歌唱力・踊り・キャラクターを順に競った。キャストは新2年生、スタッフは新4年生が中心で、作品決定や、演出から、大道具・小道具・衣装にプログラムやボスターの作成まで自前でやっている。今年にはαステーションと(財)平安建都1200年協会の後援も得、英語っ子たちは本番前のトラの穴特訓の真っ最中。

本公演の下敷きとなったミュージカルは、69年にロンドンのニュー・シアターで初演され、ベストミュージカル・オブザイヤーを獲得したビル・フリードマン演出によるもの。原作はもちろん、世界中で愛読されているモンゴメリ女史の名作だ。外国の小説に縁なきヤカラも、一度は目を通してはいるはず。おしゃべりで想像力も実行力もけたはずれに豊かな、夢見るアンは、少女たちの永遠の憧れなのだ。5日は午後6時30分、6日7日は午後6時開演、どんな赤毛が飛び出すか、とにかく観にいってみよう。

本邦には「赤毛ミュージカル」なる言葉がある。西洋人であることを示すために、赤毛のカツラをかぶることから始まった言い回しだ。しかし、赤毛の登場人物のセリフが日本語で歌だけが英語だったり、あるいは歌すら日本語だったり、独特のこぼれ感じがつきまとう。この違和感を解消してくれそうなのが5月5日〜7日に府立文化芸術会館で開かれるKTL(京都英語劇連盟)の「赤毛のアン」公演。なにしろ京都周辺大学のESS演劇班による連盟(参加学校は関西外国語短大、京都外大、京産、京女、同志社、同女、立命、龍谷、奈良女、ダム女)だけあって英語はお手の物だ。年に1回のミュージカル公演を共催して、今年で20周年を迎える。

FAME Report



京都ノソキ見トピックス

愉快が増えた北山の春。 花も実もある、散歩が素敵だ。

ブティックとメシだけじゃない北山の、自由自在な使用方法について。

京都とハリは比較対象されることが多い。行ったこともないモンマルトルの風景をしのいで、北山通りをそぞろ歩くのがなぜか気分なのだ。



ライター/大音美弥子 撮影/大田メグミ

この春、北山通が変貌しつつある。3月10日、下鴨南通北東角に雑貨のイノブキ誕生。15日にはベーカーリー進々堂オープン。もちろん、いいお店が増えるのは大歓迎だが、この2軒の新規開店の場合、どうしても気にかかっているのが、同業他店との競合。イノブキはハンズ北山の筋向かいに当たり、進々堂はコルドン・ブルーの隣のブロックにできた。しかもイノブキの1階には、FM802のFAXステーションが設置されている。「北山からお届けしています」の、αステーションの立場はどくなるんだ！ すわ戦争、と勢い込んで北山を訪れてみれば、意外や、いつもの長閑な空気に満ちている。なんだか肩透かしを食らった気分、14年来の先住人、ブティックオーナーの福本社長に状況解説をおねだりした。

「この街は、もともと個性ある小さな店の集合で成り立ってきた所です。今度入ってこられた2店は割に大規模な会社ですが、商売だけじゃない会社自身の表現がありますよね。都市計画で作られた街とはちがって、いま成熟しつつある北山に、新しい花が咲いたと言えるんじゃないでしょうか。それに……」

3月24日には、「陶板名画の庭」がオープンした。設計は安藤忠雄。大きな回廊を巡るまったく新しい屋外型のアート・スペースである。展示はダ・ヴィンチの「最期の審判」やモネの「睡蓮」をはじめとする9点。既存の植物園と府立資料館を加えれば、京都きつての文化ゾーンに育つ可能性は高い。

「アートに触れたり、植物園で日がなほーっと過ごしたり。そんな散歩の途中で出会ったら、一枚の洋服の素材にも自然の恵みを発見されるかもしれない。この街が、自分自身を発見するためのマルチ・メディアとして利用されれば、と云うのは言い過ぎですか？」